

“農”を通じて人と地域をつなぐ

～プランター農業体験からレンタル農園への展開～



J A江刺 共済部共済スマイル推進課

菊池 美千代

目次

I. はじめに	1
II. JA江刺について	1
1. 経営理念	
2. 経営方針	
III. JA江刺の現状	2
1. 組合員数の推移	
2. JA江刺管内の農業経営体	
3. 職員数の推移	
IV. 分析と課題	
1. SWOT分析・クロスSWOT分析	3
2. 内部環境分析	
3. 外部環境分析	
4. 課題	
(1) 農業体験の継続性	
(2) 若年層との接点	
(3) 連携体制の強化	
V. 提案	6
1. 提案テーマ	
2. 提案の目的	
3. 具体的提案	
(1) ステップ型プログラム導入	
(2) 地域農業体験サポートチーム設置	
(3) SNSを活用した情報発信	
VI. 期待される効果	9
1. 地域住民の農業参加と交流の拡大	
2. JAの存在価値向上	
3. 職員の成長と組織力の強化	
4. 持続可能な地域共生の実現	
VII. おわりに	10

I. はじめに

近年、農業を取り巻く環境は大きく変化している。異常気象や高齢化、後継者不足により、地域農業の担い手は減少し、農地維持や食料供給の安定にも影響を及ぼしている。また、若年層や都市部住民を中心に「農業との関わりがない」と感じる人が増え、農業は“身近でないもの”となりつつある。

一方で、コロナ禍以降「自分で育てて食べる」ことへの関心が高まり、ベランダ菜園やプランター栽培など、手軽に“農”を楽しむ動きが広がっている。こうした変化は、農業を新しい形で再発見し、JAと地域住民を結び直すチャンスでもある。JAは地域に根ざした総合事業体として、組合員だけでなく地域住民とも“農”を通じてつながる使命を持っている。

そこで本レポートでは、「プランター農業体験」を入り口とし、将来的に「レンタル農園」へと発展させる取り組みを提案する。家庭でも気軽に始められるプランター体験から一歩進み、地域の遊休農地を活用したレンタル農園へつなぐことで、地域住民が農業をより身近に感じるきっかけづくり、JAの新たな役割としての地域コミュニティ形成、遊休農地の有効活用を実現し、地域の活性化と農業の持続可能性向上を目指す。

II. JA江刺について

1. 経営理念

「共生」

私たちは、地域・自然とともに生きるJAを目指します。

「創造」

私たちは、柔軟かつ斬新な発想で、より良い社会を築くJAを目指します。

2. 経営方針

- 豊かな地域社会実現への貢献
- 農業支援拡充による地域農業の発展
- 協同活動参加・参画による組織基盤の強化
- 持続可能な経営基盤の確立

(1) 持続可能な地域農業の確立

- ①農家組合員の所得増大

(2) より豊かな地域社会の確立

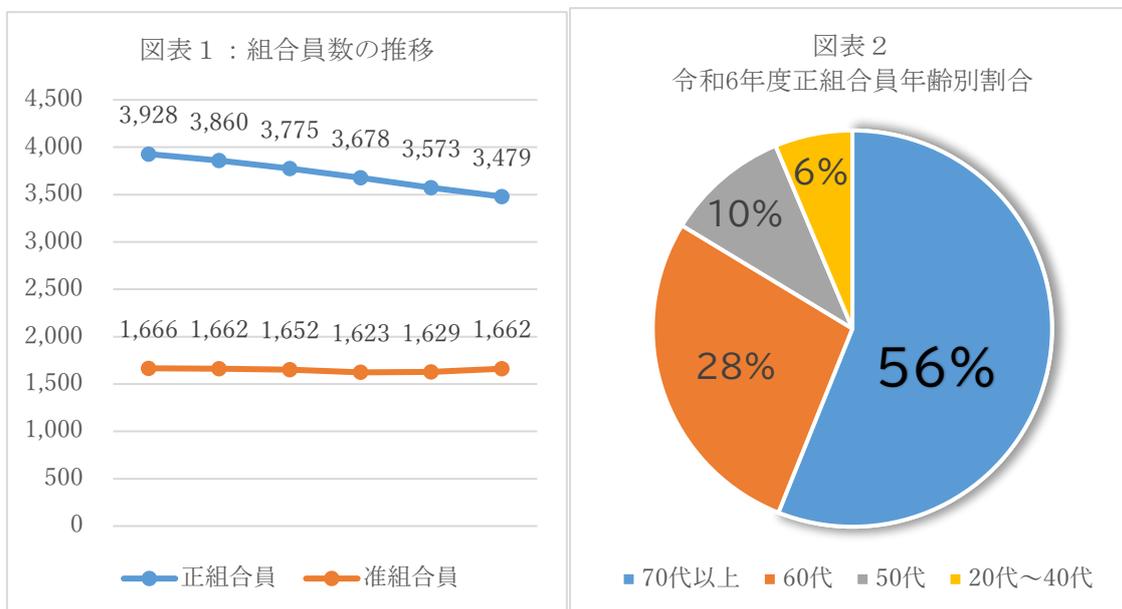
- ①「地域活性化」への取り組み
- ②「結びつき強化」への取り組み



知って欲しい。
感動する旨さ。

Ⅲ. J A江刺の現状

1. 組合員数の推移



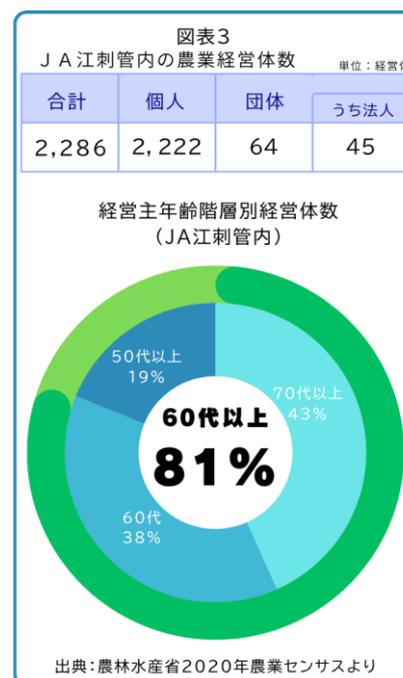
J A江刺の組合員数の推移を見ると、正組合員は令和元年から令和6年にかけて447人減少している（図表1）。直近令和6年の組合員数を年代別で見ると、70代以上が全体の56%を占めており、60代以下は44%にとどまっている（図表2）。全国的な傾向と同様に、高齢化が顕著であり、今後10年以内に離農や脱退が加速されることが懸念される。

准組合員は、ほぼ横ばいで推移しているが、その多くは住宅ローンやマイカーローンの契約を契機に加入した利用者であり、農業や地域活動との関わりは限定的である。そのため、准組合員の増減はJ A事業の利用動向を直接反映しているとは言い難い。

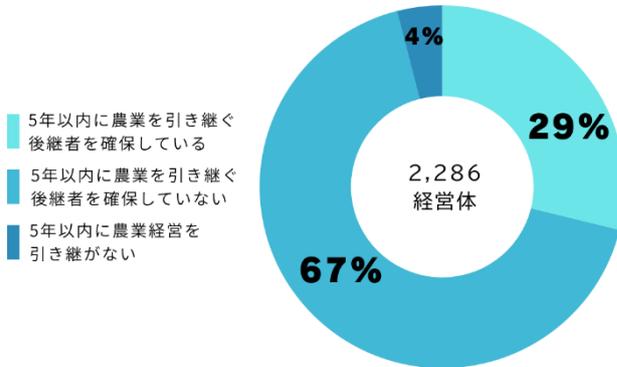
2. J A江刺管内の農業経営体

前記で述べた正組合員の高齢化に関連し、担い手や後継者数について調査した。J A江刺管内の農業経営体（参考資料：農林水産省2020年農業センサスより抜粋）を見ると、合計2,286体であり、そのうち個人経営体が2,222体と全体の約98%を占めている。一方、団体経営体は64体、うち法人経営体は45体と少数で、地域農業の多くが個人経営によって支えられている。年代別にみると、60代・70代が全体の81%を占めており、J A江刺の組合員と同様に高齢化が進んでいる（図表3）。

また、J A江刺管内の「後継者を確保していない経営体」は、67%となっており、特に米・野菜・果樹などの主要部門においては後継者の確保が難しく、今後の生産量や品質の維持、江刺ブランドの継承などが難しくなることが懸念される（図表4）。

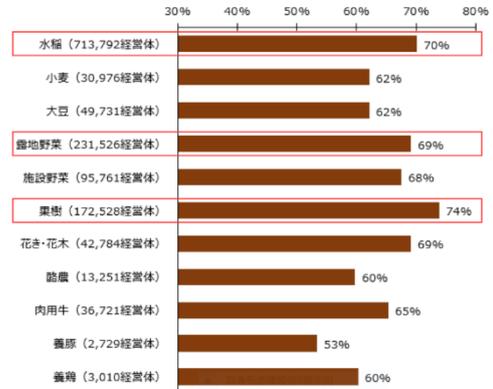


図表4
5年以内の後継者確保状況別経営体数
(JA江刺管内)



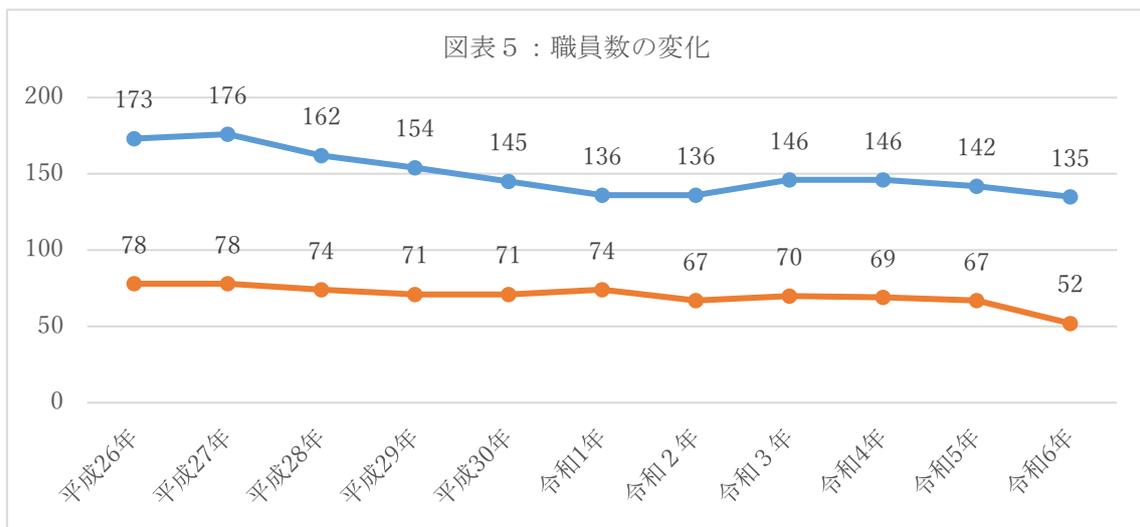
出典：農林水産省2020年農業センサスより

図表4
農業経営部門別に見た
「5年以内に農業を引き継ぐ後継者を確保していない」経営体割合



出典：農林水産省2020年農業センサスより

3. 職員数の推移



職員数は平成26年から令和6年にかけて64人減少している（図表5）。一時的に増加した年もあるが、全体的に減少傾向にある。職員の減少により、地域住民や農家との接点も減少することとなり、JAの現場力を弱める要因となっている。

IV. 分析と課題

1. SWOT分析・クロスSWOT分析

前記で述べた現状から、JA江刺は組合員の減少、担い手・後継者不足、職員の減少により地域住民や農家との接点の減少、江刺ブランドの存続の危機という問題が見えてきた。そこで、JA江刺の現状を分析し、今取り組むべき課題を抽出する。

	機会(O)	脅威(T)
	<ul style="list-style-type: none"> ・食と農への関心の高まり (食育・体験・地産地消) ・SNSやECなど新たな販路拡大 ・観光との連携 (農業体験や地域イベント) 	<ul style="list-style-type: none"> ・気候変動による生産リスク ・高齢化・担い手不足 ・地域人口の減少
強み(S)	積極的な攻撃(S×O)	差別化戦略(S×T)
<ul style="list-style-type: none"> ・JA独自のブランド ・高品質な農産物と生産者の技術力 ・JAとしての信頼と販売ネットワーク 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブランド力と高品質な農産物を活かし、体験型農業やSNS発信によるファンづくり (レンタル農園・プランター農業体験など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ブランド米や加工品など付加価値商品の開発で、他産地との差別化を図る。
弱み(W)	段階的施策(W×O)	防衛または撤退(W×T)
<ul style="list-style-type: none"> ・組合員・農業者の高齢化 ・担い手・後継者不足 ・消費者との接点や発信力の弱さ ・産直施設がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者との接点を増やすため、デジタル活用(LINE・Instagramなど)による情報発信やオンライン販売の強化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担い手育成・地域内連携を強化し、持続可能な農業体制をつくる。

2. 内部環境分析

J A江刺は1982年の設立以来、地域農業を支える中核組織として、営農支援・ブランド育成・地産地消など幅広い活動を展開してきた。地域に根ざした信頼関係や指導員・生産者の技術力は大きな強みであり、農産物ブランドの確立にも寄与している。

しかし、支店再編や産直施設の閉店により、J Aが地域住民と直接関わる機会が減少している。また、若手職員の中には農業未経験者も多く、地域の農家や住民と連携して活動する場も少ない。さらに、広報活動が紙媒体中心で、SNSなどを活用したデジタル発信が十分ではないため、若年層や都市部住民との接点が弱い。

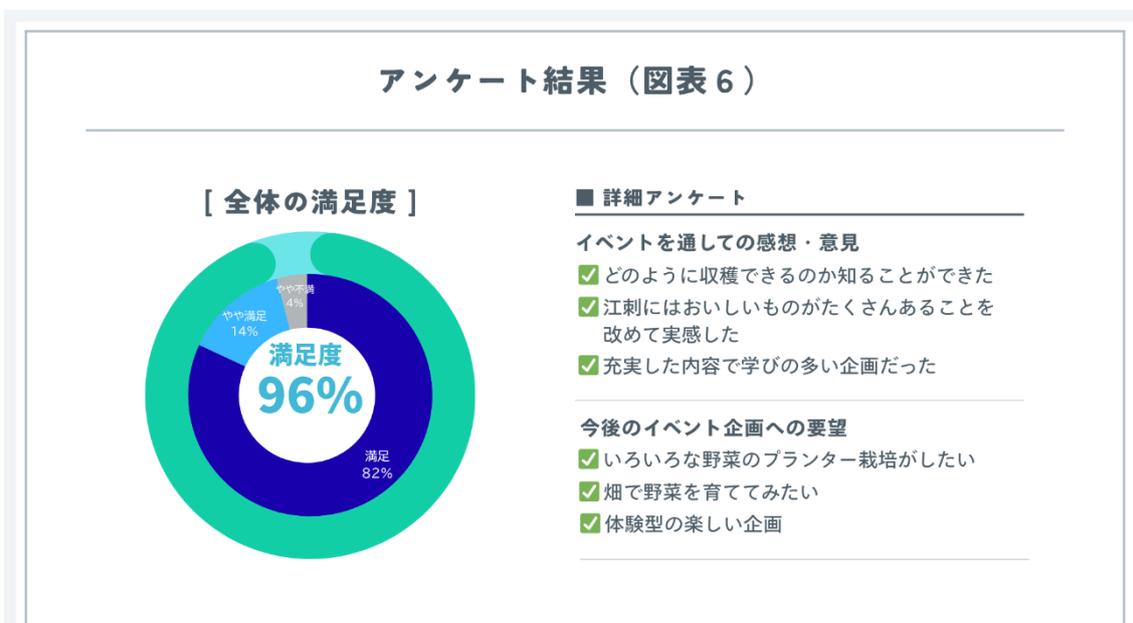
このように、J A江刺は「ブランド・技術・信頼」といった強みを持つ一方で、「発信力・人材交流・継続的な体験機会」の不足が地域との関係深化を妨げている。

3. 外部環境分析

コロナ禍以降、「自分で育てて食べる」ことへの関心が高まり、家庭菜園やプランター栽培など、手軽に“農”を楽しむライフスタイルが広がっている。

今年度、小学生向けに県内7 J Aで実施したプランター栽培体験イベント「わくわく純情プランター」では、J A江刺も32組65名が参加し、アンケート調査の結果、満足度95%

と高い結果を得た（図表6）。アンケート調査の中で、「もっと農業体験をしたい」「畑で野菜を育ててみたい」という声が多く、顕在的な需要が高いことがわかる。しかし、これらの体験は多くが一度きりのイベントに留まり、継続的に農業に関われる仕組みが整っていないことが課題として浮かび上がる。また、異常気象による高温被害などにより、地域農業の持続性が課題となっている。



当日の様子

JJA江刺

「わくわく純情プランター」参加者募集！！

【第1回 ミニトマトをプランターに植えよう！】

日時 令和7年5月17日（土）10時00分から12時00分
 場所 JJA江刺 本店 江刺農業活性化センター 担い手研修室
 ※住所：江刺市日堂字反町362-1

内容 ミニトマト（プチぶよ）の定植体験

対象 小学生の親子・家族 50組100名（先着順）
 ※全3回のイベントに参加いただけます。第2回以降のイベントに参加できるのは第1回に参加いただいた方に限らせていただきます。日時等の詳細は参加者へ別途ご案内いたします。

その他 必要な道具はJJAで準備いたします。
 定植したプランターはお持ち帰りいただけます。 県内7JA共通・主催
 定植費100円

第2回 **野菜収穫体験/バスツアー** 【7月下旬】
 第1部：きゅうり収穫体験
 第2部：園芸センター見学

第3回 **地産地消パーベキュー大会** 【9月中旬】
 第1部：オリエンテーション
 第2部：パーベキュー大会

※イベントの内容は天候等によって変更になる場合がございます。

【申込方法】※電話・メールにて受け付けます。

☆問合せ JJA江刺 総務部 総務企画課
 ☆住 所 豊州市江刺日堂字反町362-1
 ☆電話 0197-35-0211
 ☆メール messages@term@jassashir.or.jp
 （事前に「@jassashir.or.jp」のメール受信設定をお願いします）

申込締切 5月7日（水）

※主催者又は主催者に認められた観客等によって撮影された画像等がJJAの広報誌・新聞及びインターネット等で公開されることとなります。参加申し込みにより上記取扱いに関するご承諾をいただいたものとさせていただきます。

保護者名義 (id:01) _____ 児童名義 (id:01) _____ (小・中学校 児童)

住所 _____ 児童名義 (id:01) _____ (小・中学校 児童)

携帯番号 _____ メールアドレス _____

※お持ち帰りの個人情報等は活動の目的以外には使用いたしません。



※「わくわく純情プランター」について

小学生を対象とした県内7JA共通のプログラムで、プランターでミニトマトを育てるイベント。1回目は定植、2・3回目には各JAでイベントを企画し行われた。参加した小学生には記念品が贈られ、ミニトマトの成長をSNSに投稿し、県内の仲間とつながれる仕組みも取り入れられた。

4. 課題

分析から今後の取り組みを検討する上で重要と考えられる3つの課題を整理する。

(1) 農業体験の継続性

「わくわく純情プランター」などのイベントや学校行事を通して農業体験の機会は一定数存在するものの、ほとんどが「収穫体験」などの一日イベントで終わっている。外部環境分析に記した要望にもあるように、参加者の中には「またやってみたい」「自分でも育ててみたい」と感じる人がいても、継続的に農業に関われる場が少なく、関心が一過性で終わってしまう。これは、農業の楽しさや意義を深く理解する機会を逃すだけでなく、地域農業への関心を次世代へ繋ぐチャンスを失う要因ともなっている。

(2) 若年層との接点

若い世代や都市部の住民にとって、農業は「自分とは関係のない仕事」という印象が依然として強い。特に非農家層では、JAの存在や活動内容を知る機会が少なく、「農業＝遠い存在」と感じられている。

一方で、SNSを通じた情報収集や「体験型消費」に関心をもつ層も多く、JAがこれらの層に向けた情報発信や体験機会を提供することで、新たな関係構築が期待できる。つまり、“興味はあるが関わり方がわからない層”に対する接点づくりが今後の鍵となる。

(3) 連携体制の強化

JA職員の中には、農業経験が少ない若手も多く、地域住民や農家と協働して活動する場が限られている。そのため、組合内外での情報共有や相互理解の機会が不足し、地域ぐるみで農業を支える基盤が弱まっている。このような連携不足は、JAの持つ人的・物的資源を有効に生かしきれない要因となっている。

以上の課題を整理すると、JA江刺には、(1) 一過性ではなく継続的に関われる農業体験の場づくり、(2) 若年層・都市住民との新たな接点構築、(3) JA・農家・地域住民の新たな接点構築が必要であると考ええる。

V. 提案

1. 提案テーマ

【“農”を通じて人と地域をつなぐ】
～プランター農業体験からレンタル農園への展開～

2. 提案の目的

クロスSWOT分析から抽出された課題により、JA江刺が地域住民と新たな関係を築

くため、「プランター農業体験」を入り口とし、段階的に「レンタル農園」へと発展させる取り組みを提案する。「農」に興味を持ち始めた層を継続的な関わりへ導くことで、JAの存在価値を高め、人と人、人と地域、そして人と農業をつなぐことを目的とする。

3. 具体的提案

(1) ステップ型プログラム導入



ステップ1：プランター農業体験 ～身近な“農”との出会い～

今年度行われた「わくわく純情プランター」をもとに、参加対象を小学生親子・若年層・シニア層とした「プランター農業体験教室」を開催する。手軽に始められるミニトマト・葉物野菜などを題材に、栽培・収穫、JA施設見学・収穫体験、江刺ブランド農産物の食の体験までできる内容とする。体験の様子をSNSで発信することで、地域内外にJA江刺の魅力伝え、ファン層を拡大する。

- ・開催回数：年3回（5月～9月）
- ・開催場所：JA江刺 本店駐車場
- ・参加対象：地域住民（組合員以外も可）
- ・参加人数：50組100名程度
- ・指導者：地元農家、営農指導員
若手職員プロジェクトメンバー
- ・情報発信：JA江刺公式SNS
地域広報誌
学校配布チラシ など

ステップ2：プランター会員制度 ～継続参加への誘導～

体験に参加した人を対象に、「プランター農業会員制度」を設け、JA江刺が苗・肥料・栽培アドバイスをセットで提供する。会員費は無料とする。LINE公式アカウントを開通し、LINE友達登録をしていただき、苗・肥料・プランターのセット販売情報や栽培のコツ、イベント情報を配信しながら会員とのつながりを保つ。また、会員限定の交流イベント

（「プランターコンテスト」「私の育てた“推し野菜”投稿）」などを行いコミュニティ化を進める。



ステップ3：レンタル農園の開設 ～本格的な“農”への一歩～

プランター農業体験で育てる楽しさを知った人を対象に、地域の遊休農地を活用した「レンタル農園」を提案する。区画を小さく分け、初めての人でも管理しやすいようJAがサポートする仕組みとする。これにより、地域住民が気軽に農業に参加でき、農地維持・活用にもつながる。

<ul style="list-style-type: none"> ・利用期間：1年間 ・場 所：本支店近隣の遊休農地 ・区 画 数：10区画 (1区画面積10平方メートル) ・利用料金：年間5,000円 ・施設設備：農機具収納施設、水道、簡易駐車場 等 ・指導体制：営農指導員による定期指導 地元農家との交流 若手職員サポートチーム 	<p>野菜づくりを はじめてみよう！</p> <p>お申し込み・お問い合わせ 01-2345-6789</p> <p>利用中！</p>
--	---

(2) 地域農業体験サポートチーム設置

本取り組みは、JA職員が地域とともに“農”を学ぶ絶好の機会でもある。若手職員を中心に「地域農業体験サポートチーム」を設置し、企画運営・情報発信・会員対応を担当する。職員が自ら農業を体験し営農知識を深める、地域農家との関係が強化される、JA全体としての一体感が生まれるといった効果が期待できる。

(3) SNSを活用した情報発信

レンタル農園利用者やプランター会員の活動を、SNSやJA広報誌で発信することで、参加者以外の地域住民にも“農のある暮らし”を広める。また、市や学校などと連携し、子

どもから高齢者までが関われる地域ぐるみの体験活動へと発展させる。

VI. 期待される効果

1. 地域農業の担い手構築

プランター農業体験を通じて、これまで農業に縁のなかった地域住民が気軽に「農」に触れる機会を得る。プランターからレンタル農園へとステップアップすることで、単発の体験にとどまらず、継続的に地域の農業へ関わるができる。そして、JAが主導して「気軽に始められる農」を段階的に提供することで、“農に興味を持つ人”を“地域農業の担い手”へ育てていく仕組みを構築できる。このような活動が広がることで、「地域ぐるみの農業」「暮らしの中の農」が再び息づくことが期待される。

2. JAの存在価値向上

本取り組みは、JA江刺が地域住民と農業を結ぶ“架け橋”としての役割を果たすものである。プランター農業体験からレンタル農園を通じて、住民がJAに親近感を持つようになり、「JA=身近な暮らしのパートナー」というイメージが浸透する。その結果、JAへの信頼と関心が高まり、組合員の定着・利用拡大にもつながる。

3. 職員の成長と組織力の強化

若手職員が中心となって地域住民や農家と関わることで、営農知識やコミュニケーション力の向上、地域理解の深化が図られる。また、イベントの企画・運営・情報発信を通じて、自ら考え行動する力が養われ、「地域とともに歩むJA職員」としての意識向上にもつながる。さらに、部門を超えた連携（営農・金融・共済・広報など）が必要となるため、職員同士の協力体制が生まれ、組織全体の一体感・柔軟性が高まることも期待できる。

4. 持続可能な地域共生の実現

この取り組みの根底にあるのは、「農を通じて人をつなぐ」という理念である。プランターから始まる小さな体験が、人と人、人と地域、そして人と農業を結び、やがて「持続可能な地域共生」の姿へとつながっていく。JA江刺がその中心となり、地域に笑顔と交流を生み出すことでJAの使命を実現することができる。

VII. おわりに

農業を取り巻く環境が大きく変化する中で、地域に根ざすJAの役割も変化を求められている。これまでJAは、生産者の営農支援や経済活動の中心として機能してきたが、これからの時代は「地域住民とともに農を育む組織」へと発展していくことが期待されている。

また、JA職員にとっても、地域の人々とともに活動する中で多くの学びと気づきを得ることができ、“自ら考え、地域に寄り添うJA”という姿勢が育まれていく。こうした一つひとつの小さな実践の積み重ねが、やがて地域全体の活性化へとつながり、JAの存在価値をより確かなものにしていく。

JA江刺が掲げる「共生」「創造」という経営理念のもと、人と人、農と暮らしをつなぐ新たな取り組みとして、このプランター農業体験から始まるプロジェクトを実現していきたい。そして、誰もが“農にふれる幸せ”を感じられる地域づくりを目指して、JA江刺はこれからも地域の未来をともに育んでいく。

(参考文献)

- ・ JA江刺 総代会資料
- ・ 農林水産省 2020年農林業センサス

